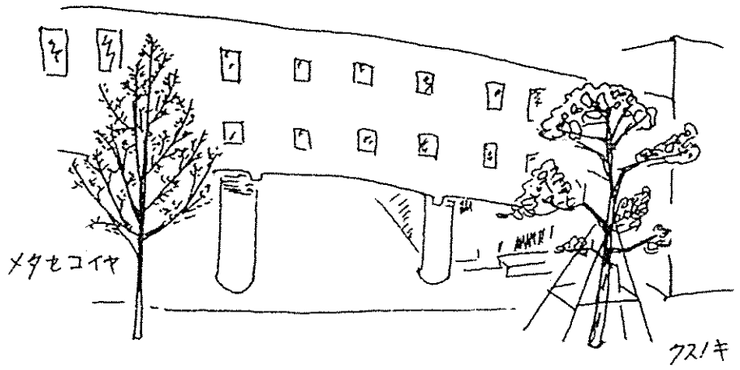
生存していることが分かったのも、日本に来る６年前のことです。
高さ３５メートル、幹の直径３メートルもの巨木になるそうで、実際に目にすることができたら、自然の脅威と感じるに違いありません。
スギ科。あの柔らかく美しい新緑に杉のイメージはありませんが。
和名、アケボノスギ。成長が非常に速く、真っすぐに空に向かって伸びていく様子をよく表している名前ではありませんか。



クスノキ

左側。巨木になることメタセコイアに負けません。
昔、中国では「巨なるもの神となす」として信仰の対象としたそうですが、そう言えば、たまに絞め縄を巡らしたクスノキをご覧になったことはありませんか。
春、木々が一斉に芽吹く頃、大木を覆う赤い芽立ちが鮮やかです。そして、夏の気配が感じられる頃、昨年の冬を越してきた葉を一気に振るい落とします。
耐寒性には乏しく、若木のとき、関東地方でも越冬のための防寒対策が必要です。また、大木の割りにはもろく、相当に太い枝でも上るのは危険です。
葉や幹から、ショウノウを採っていました。葉をよく揉んで嗅いでみてください。幼かった頃にお母さんの着物に漂っていた、あの懐かしい香りに遭えますから。

学校便り　７月号　（６・７・１）

センダン

運動場のバックスタンドの中頃に２本、この樹木が植えられています。
樹形に特徴があって、枝は高い位置で傘のように開いています。小ぶりの葉が長い葉柄に適当な間隔で並んでいますから、フワリと軽ろやかなパラソルのイメージです。
「センダンは双葉よりかぐわし」とか。世に大成するほどの人は幼少のころから素質が窺われるものだ、という故事に言われる樹はビャクダンのこと。
けれども、この樹の花の香りも逸品です。ほのかに、上品に、甘く。
５月半ば、パラソルの上に淡い紫の花を咲かせました。遠目には霞のような花ですが、その一輪一輪は、小さくても凛々として力強い輪郭をもった花でした。

タブノキ

三世紀に書かれた「魏志倭人伝」に倭国に産する樹としてタブノキと思われる樹木のことが載っているそうです。福井県の貝塚から出土した食器がタブノキ製であるとか、「日本書紀」に浮宝（うくたから）と記されている船の材料としてタブノキと杉が挙げられているとか、はたまた「万葉集」にタブノキを詠んだものがあるとか、とにかく縄文の昔から人々の日常生活に深くかかわって来たものと思われます。

（画）佐橋裕治

海に沿った暖林帯の重要な構成樹木で、長い卵形をした葉は厚く表面はつやのある濃い緑色を、そして、裏面は茶色みをおびた薄い緑色をしています。
樹皮は粉末にして水を混ぜるとよく粘ることから、線香の粘着材として利用されたり、染料にもなったりします。
直径１メートルの大木もあるようですが、本校のタブノキはまだまだ小さいながら、バックスタンド向かって左側に、堅く太めの枝を張って立っています。

クロガネモチ

それでは、バックスタンド向かって右側に目を移しましょう。
とりもちを塗った竿を爪先だって精一杯伸ばしている子供を描いた水墨画を見たことがありますが、竿の先に狙っているのはスズメだったでしょうか、カブトムシだったでしょうか。
とりもちはモチノキの樹皮をすりつぶして作ったものだそうですが、クロガ